

## 土を大切にすること

(独)農業環境技術研究所 理事 長谷部 亮



**美**しいフィヨルドで有名なノルウェーのベルゲンを訪れたことがあります。町並みやフィヨルドを一望できる山にケーブルウェイで登りました。その途中の切り通しを見ると、表土はわずかばかりで、その下は岩の厚い壁でした。薄い表土しかない理由は、この辺りの地層が5億年以上前の先カンブリア紀の古い岩盤で成り立ち、氷河期の終わりに表土が削りとられたためと考えられています。

表土が薄いところは世界のあちこちにあります。司馬遼太郎の紀行「街道をゆく」（朝日文庫、1993）に、アイルランドの大西洋側にあるアラン島の話があります。ここも地面は岩がむき出しで、司馬は「岩盤の上にキナ粉をふりかけた程度の土しかない」と表現しています。住民は懸命に岩のくぼみにたまった土を集め、土が飛ばないように石垣を作り、砂利や海藻を混ぜて土を増量するなど工夫してなんとか農業を営んでいます。土を肥えさせる“土作り”ではなく本当の“土”作りから始めなくてはならず、誠に涙ぐましい努力です。

豊かな表土に恵まれても、それがあとかたもなく失われてしまうこともあります。デイビッド・モンゴメリーの「土の文明史」（築地書館、2010）を読むと、“地球の皮膚”である土が、古今東西を問わず、人間によって酷使・浪費され、その結果、土の劣化と侵食が起こって文明の破綻・崩壊を引き起こしたことが、現代でも同様な脅威を与え続けていることが良く分かります。

また、表土が失われなくても、土が“汚れて”使えなくなることもあります。土は大気、水にむき出しで存在するため、汚染にはぜい弱です。「自然環境という大切な社会的共通資本を、資本主義の国々では、価値のない自由財として、広範にわたって汚染しつづけた。

また、社会主義の国々でも、独裁的な政治権力のもとで、徹底的に汚染し、破壊しつづけた。」経済学者の宇沢弘文氏は「社会的共通資本」（岩波新書、2000）の中で、このように述べています。まさしく、土壌にとって近代は、汚染の歴史です。

さて、日本はどうでしょう。日本は有り難いことに世界の他の国に比べて土に恵まれています。日本の国土は、温暖湿潤気候下で岩石の風化が比較的速く、また、火山国であるため火山灰の供給があり、さらに、沖積地では河川による上流からの土砂の供給があることや、山に緑が多く土壌侵食も少ないことなどから、土は常に豊かで、表土が無くなるという恐怖感はありません。一方で、土の汚染については、東日本大震災での津波による塩害や放射能による汚染に留まらず、心配の種がつきません。

「表土は何十年もかけて築いた農家の財産。大切に使いたい。」宮城県石巻市農家の方の言葉です。津波により表土に木片やガラスのかけらなど細かいがれきが混ざったため、表土を削って、何ヶ月もかけて専用の大型機械でふるいをかける作業の様子（『日本農業新聞』2013.2.27）が取材されています。

「土を損なう国は、国自体を損なうことになる。」フランクリン・D・ルーズベルトの言葉です。土はかけがえのない公共財産であり、世代にまたがる資源です。放射性物質に限らず、あらゆる汚染から土壌を守り、安全で豊かな土壌を次世代に継承するためのゆるぎない意志とたゆまぬ努力がこれまで以上に今必要とされています。